「ゆるす」ということ

村上　篤
白石市立白石第二小学校　教諭

教　科	道徳＜２－（4）寛容・尊敬＞	対　象	５年１組34名　５年２組34名 ６年３組35名　６年２組35名

Ⅰ　実践の目的

今回，私が教師海外研修の派遣先をルワンダに選んだ最初の動機は，94年のジェノサイドと，その後のルワンダが歩んできた和解の過程に対する強い関心であった。

歴史的な背景があるとはいえ，同じ人間同士であれほど惨いことをしてしまったのはなぜか。そして，「アフリカの奇跡」とまで言われる発展を今のルワンダが実現できているのはなぜなのか。このことについて考えることは，我々の身近に起こる対立・衝突を乗り越えるヒントが得られるのではないかという思いから，「ゆるす」ということを子どもたちと一緒に考える道徳の授業を行った。

本時の主題は，学習指導要領の内容項目２ －（4）「謙虚な心をもち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にする」を受けたものである。

他者との意見の相違はときに対立を生み出す原因となる。この時期の児童は，友達との関係に敏感である。これからの人生の中でも対立や相違を乗り越え，互いを尊重しあう関係を築くために，それぞれができることを考えさせる必要がある。

そこで，ルワンダ虐殺の例を用いて，真に「赦す」という行動とは何かということに気付かせたいと考えた。

本校高学年の児童は周囲の状況をよく観察しており，困っている友達がいるとすぐさま助ける様子が多く見られる。しかし，友達の良くない行いや，「もっとこうしたほうがいいんじゃないか」と注意をしたり，忠告したりする様子はあまり見られず，表立った対立を避けている様子が見受けられる。

意見がぶつかってしまったときには，合理的な解決策を自分たちで導き出すことは難しく，担任が支援をして解決することが多い。

資料は子ども向けにルワンダ虐殺の概要と生存者の証言を書き著した後藤健二氏の『ルワンダの祈り』（汐文社刊）を用いる。資料で虐殺を生き抜いたアルフォンシンさんの証言を紹介する。そして，教師が実際に見聞きしてきた，今のルワンダに生きる虐殺の加害者・被害者の協働の様子を伝え，「ゆるす」ことについて考えさせる一助とする。内容は，NGO REACH の代表フィルバート・カリッサさんの「赦すことは難しい。赦す心は神の贈り物」という言葉を紹介した。

以上の実態を踏まえ，次の点に留意して指導に当たった。

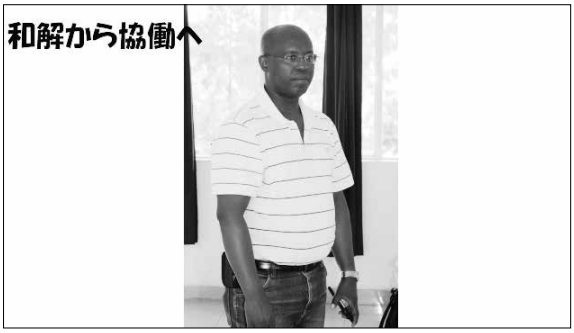
①「ゆるす」対象の程度を具体的にもたせるため，それぞれの「かけがえのないもの」を絵に描き，破らせるという葛藤場面を設ける。６年生の２学級については絵ではなく，言葉で書かせた。

②ワークシートに自分の気持ちを書く活動を取り入れることにより，発言前に自分の気持ちを整理させたり，教師の意図的な指名の際に役立てたりする。

③意見発表の場面では，Ｐ４Ｃの手法を用いて話しをさせる。

④資料は教師の範読を基本とし，後で配付する。

⑤写真資料を提示し，今回のテーマに現実感をもたせる。



・NGO REACH の支援する養豚場で働くジェノサイド・NGO REACH 代表を務めるフィルバートさん被害者（左）と加害者（右）

和解から協働へ

・NGO　REACH代表フィルバートさんの話

赦すことは難しい。
赦せる心は神の贈りもの。

・フィルバートさんの言葉

ホームステイ先のお父さん
ジョンさん（精神科医、大学の先生）のお話

We must respect each other.
互いに尊重しなければならないんだ。

・ホームステイ先のジョンさんの言葉

Ⅱ　授業の構成

＜渡航前＞　**アフリカに行ってきます。**
ところでアフリカってどんなところ？（アンケート実施）
児童の回答：暑い　野生動物　砂漠　黒人の国　貧しいなど

↓

＜学級活動＞
夏休み中の思い出を伝え合おう
ルワンダで感じたことを伝える。

↓

＜道徳＞
「ゆるす」ということ

＜課外＞
YOU は何しにルワンダへ新聞　発行
ルワンダの衣食住など，人々の生活の様子などを伝える内容で壁新聞を作成し，児童の興味関心を高める。

Ⅲ　授業の詳細

ねらい

・「ゆるす」という行為について考え，寛容であることの尊さに気付かせる。

・互いに尊重し、謙虚であることで対立を生まない関係が作れることに気付かせる。

資料名

後藤健二著　『ルワンダの祈り』　汐文社刊

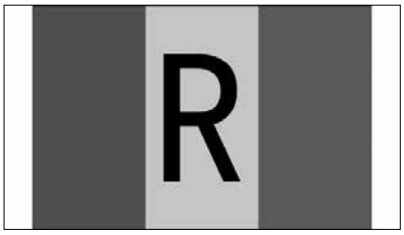
指導過程

段階	学習活動と主な発問	予想される児童の反応	指導上の留意点	準備物
つかむ 5分	1．「かけがえのないもの」の絵を破るよう指示し，本時の場面設定をつかませる。	・友達の大切なものは破れない。 ・本当に破っていいの。 ・破ってしまえ。	・本当に破る児童がいることも考えられるため，配布後にどれだけ大切に思っているものか考えさせる。	「かけがえのないもの」の絵
深める 25分	2．資料「ルワンダの祈り」を読んで話し合う。 アルフォンシンさんはゆるせるのでしょうか？	○ゆるす ・この先も生きていくためにゆるす。 ○ゆるさない ・家族は帰ってこないからゆるせない。	・教師の範読を聞かせる。資料は配布しない。 ・資料を読みながら，場面絵を黒板に貼り概要をつかみやすくする。 ・資料にない事実について補いながら話す。 （例、2つの民族について同じ言語、同じ文化で生きてきたこと） ・ワークシートに自分の考えと，理由も書かせる。	場面絵 ワークシート
見つめる 15分	3．資料の終末部分を読む。 ・悲劇を乗り越えたアルフォンシンさんは国会議員として活躍したことを伝える。 4．現在のルワンダに生きる人の和解の取り組みを紹介する。	・すごい人だな。 ・ゆるせるなんてなんて心の広い人だろう。 ・家族や大切な物を傷つけられたらゆるせない。	・加害者の多くが虐殺に加担せざるを得なかった事情も説明する。 ・NGO REACH の協働の様子についてスライドを見せる。	コミュニティボール

段階	学習活動と主な発問	予想される児童の反応	指導上の留意点	準備物
	5.「ゆるす」ということについて話し合う。 6. 教師の説話を聞く。	・ゆるせることもあるけれど，程度による。 ・ゆるしたほうがいいことは分かっているけど、できるかどうかは分からない。 ・ゆるしてあげることで自分が楽になる。	・ここからは虐殺の例から離れることを伝えてから話し合う。 ・「ゆるせない」という意見についても認め、一方の価値観に偏らないようにする。 ・一方に偏る場合は教師も発言し、どちらの意見も発言しやすい雰囲気をつくる。 ・意見の交流ができたことを称賛する。 ・今のルワンダで生きる人がどう考えているか伝える。 ・互いに尊重しあうことが大切。	

6学年2学級での実践

担任外の学級であるので，はじめにルワンダ共和国の概要について写真資料（パワーポイント）を用いて説明した。内容は学級活動の時間に行った「夏休みの思い出を伝え合おう」で児童に伝えたものと同様である。



また，葛藤場面については「かけがえのないもの」について，絵ではなく言葉で書くことに代えて行った。

導入部分では，それぞれ交換し合った友達の「かけがえのないもの」について破るように指示

したが，誰一人として破った児童はいなかった。

展開の場面では，資料に補足の説明を加えながら範読を行った。児童は真剣に耳を傾けていた。

最後の「ゆるす」ということについて話し合う場面では，「ゆるせない」という児童が全体の３分の２を占めた。

ゆるせない
・家族は帰ってこないから。　・大切なものを傷付けられたから。
・反省しているフリをしているだけかもしれないから。
・理由はない。ゆるすべきではないから。
・ゆるしてあげることができればよいのは分かっているけれど，ゆるせる自信はない。

ゆるす
・ゆるさないと前に進めないから，仕方なくゆるす。
・本当に反省していることが分かればゆるす。
・自分も加害者側だったらゆるしてほしいと思うからゆるす。

わからない
・加害者が自分の近くに戻ってくることが理解できない。
・難しい問題。想像できない。

担任学級での実践

本学級では話し合い活動の手法としてＰ４Ｃを用いた。

Ｐ４Ｃ（子どもの哲学 philosophy for children）とは

なぜ、どうしてをクラスみんなの前で問いかけ、自分なりの答えを探し、考えたことを素直に話すためには、安心して話すことができる関係が必要だと、子どもの哲学は考えます。話すことが参加のすべてではありません。哲学の輪の中でクラスの友達の意見を聞きながら、じっくりと考えを巡らせることは、もしかしたら話すことよりもずっと大切なことなのかもしれないのです。子どもの哲学は、その場に安心して「いる」ことができ、子どもたちそれぞれのやり方で対話に参加できるような関係を作ることを目指しています。　Ｐ４Ｃ　Japan（http://p４c-japan.com/）ホームページより

導入の場面では友達の「かけがえのないもの」の絵を「え？本当に破るの？」「申し訳ない！」と言いながら破る児童もいた。

話し合いの場面では，まず「ゆるす」「ゆるせない」の立場を表明させたが全員が「ゆるせない」という立場であった。その後，「ゆるす」ということについて話し合いを行った。

自由発言にしたのだが，テーマが難しかったこともありなかなか進んで発言することができなかった。しばらく待っていると数名の女子児童が発言した。普段の授業ではあまり目立たない児童たちだったのが印象的だった。

この日の学習では「ゆるす」というテーマについて深めることができなかった。

しかし，その日の宿題の自主学習で「ゆるす」ということについて自分の意見を書いてくる児童が５名ほどいた。そこで，もう一度話し合ってみるか提案してみたところ乗り気だったので，再び学級活動で話し合うこととなった。２回目の話し合いでは若干「ゆるす」という意見が増えた。「ゆるす」という考えの内容については６年生のものと同様であった。

ワークシート

p4cカード（　）月（　）日（　　）曜日　名前（　　）

○今日のテーマ

○テーマについて自分の問い（みんなと話合ってみたいこと，なかなか答えが見つからないこと）

○今日のみんなの問い

○問いについての自分の考え

○今日の活動を振り返ろう

（1）当てはまるところに○を書きましょう。

1　話し合いは，楽しかったですか。		
楽しかった	まあまあ	あまり楽しくなかった
2　安心して話せましたか。		
安心して話せた	まあまあ	安心して話せなかった
3　問いについて，ゆっくり深く考えることができましたか。		
よく考えることができた	まあまあ考えた	考えることができなかった

（2）今日の「問い」自分の考えをまとめたり，さらに不思議に思ったりしたことを書きましょう。また，友達の考えでおもしろいと思ったことも書いていいです。もちろん，授業の感想でもいいです。

Ⅳ　実践の成果

担任する学級での実践であるが，子どもたちなりに思うところがあったらしく授業のあとも考え続けていた。授業後は「ゆるす」という主題がこの子どもたちには難しすぎたかと思ったのだが，徐々に自分たちの身近な例に置き換えたり，親と話したりしながら考え続けていた児童がいた。

それに関連して，５学年・６学年ともに，保護者からの肯定的な反応があったことも成果として挙げられる。

大人にとってもジェノサイドは非常に重いテーマであるが，使用した資料が後藤健二氏の物であったことなどから関心を呼び，親子で「ゆるす」ということについて考えるきっかけになったようである。また，授業参観等で来校された際に壁新聞を目にされた保護者が少なからずいたことも呼び水となった。「実際に見聞きして来た先生の話を聞かせてもらい有難い。」（６学年保護者）「難しい内容でしたが，親子で話し合うきっかけになりました。互いに尊重することの大切さがわかりました。」（５年保護者）など，嬉しいリアクションがあった。

元々，主な授業として考えていた道徳の授業よりも壁新聞の効果が大きかった。担任してい

ない学年の保護者からも子どもたちにルワンダの話をしてほしいということを伝えられた。壁新聞を見た低学年の同僚からも「ぜひ，学年でルワンダの話を聞かせてほしい」という出前授業の依頼を受けた。

学級の児童・保護者向けには学級通信でも今回の研修での経験を伝えていたので，結果的に保護者を巻き込んだ活動にすることができた。

今回は私の最初の動機に従いジェノサイドを扱った。小学校高学年という発達段階にあり，人類史上類を見ないこの悲劇について取り扱うことは非常に危ういということも懸念された。もちろん異論があることは承知であるが，子ども向けに書かれている今回の資料を用い，必要最低限の事実を伝えるに留めるのであれば，十分扱うことのできる内容であるとの感触を得た。肯定的にとらえる保護者が多かったことは，過去の悲劇を乗り越えたルワンダが奇跡的とも言える発展を遂げたことを学級通信や壁新聞などで，あらかじめ知らせておいたことの影響もあったと考えられる。

V　課　題

・「ゆるす」という抽象的なテーマを考えるときに，児童の実態や経験などに大きく左右される。６年生と５年生では，１年の違いが非常に大きいと感じられた。
担任する学級ではことあるごとにジェノサイドの詳細以外，ルワンダについて伝えていたつもりであった。しかし，１時間の授業の中でルワンダの概要を伝えた６年生の方が，「ゆるす」というテーマに短い時間でも迫ることができた。
５年生で授業を行うのであれば，普段あまりないことではあるが２時間扱いにするなど，実態を踏まえた授業構成をする必要があることが分かった。

・そもそも「ゆるす」ということが道徳の価値項目，「寛容・尊敬」にあたるのであろうか。ルワンダの人々がジェノサイドの加害者・被害者を乗り越えて発展しているのは人々が寛容であるからなのか，互いに尊敬しているからなのかという疑問が生じた。道徳という領域で扱う以上，内容と価値の整合性をもう一度吟味し直す必要がありそうである。

・話し合いの手法にこだわりすぎてしまった。Ｐ４Ｃでは全体での話し合いとなり，一人で大勢の前で発言する。批判したり，冷やかしたりしないというセーフティルールは守られるが小集団（ペア・グループ）の場で，より積極的に自分の意見を表明しダイナミックに交流する機会が失われてしまった。ワークシートには意見を書くことができたが，話し合いに参加したという実感を持たせるためにも小集団での話し合いを行うべきであった。

・この研修の成果を道徳の１時間だけで子どもたちに還元させることは到底できない。大変もったいないことである。総合的な学習の時間などで国際理解教育の大きな柱を立て，腰を据えて実践していく体制を整えなければならない。そのためには小さな実践を積み重ね，理解者を増やしていくことが肝要である。何より子どもたちに「楽しかった」「ためになった」と思わせた実績を積極的にアピールしていきたい。

関連する学習指導要領の内容と文言

第３章　道徳

第１　目標

道徳教育の目標は，第１章総則の第１の２に示すところにより，学校の教育活動全体を通じて，道徳的な心情，判断力，実践意欲と態度などの道徳性を養うこととする。

道徳の時間においては，以上の道徳教育の目標に基づき，各教科，外国語活動，総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら，計画的，発展的な指導によってこれを補充，深化，統合し，道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め，道徳的実践力を育成するものとする。

第２　内容

道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の内容は，次のとおりとする。

〔第５学年及び第６学年〕

２．主として他の人とのかかわりに関すること。

(1) 時と場をわきまえて，礼儀正しく真心をもって接する。

(2) だれに対しても思いやりの心をもち，相手の立場に立って親切にする。

(3) 互いに信頼し，学び合って友情を深め，男女仲よく協力し助け合う。

(4) 謙虚な心をもち，広い心で自分と異なる意見や立場を大切にする。

(5) 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し，それにこたえる。

●出典・参考図書

・後藤健二著　『ルワンダの祈り　内戦を生きのびた家族の物語』　汐文社（2008/12）